

多動性・衝動性の高い児童の対人関係の発達を促す 臨床心理学的援助に関する研究 —対人関係発達を促すプログラム及び対象児間の意識の変化に関する検討—

九州大学大学院	中 村 真 樹
九州大学大学院	小 澤 永 治
九州大学大学院	飛 永 佳 代
九州大学大学院	遠 矢 浩 一
九州大学大学院	針 塚 進

本研究では、多動性・衝動性の高い児童を対象に、対人関係発達を目的としたグループセラピーを行った。対象児童には毎回プログラムに参加している他児への意識に関する質問紙を実施し、対象児間の意識の変化について検討した。グループのプログラムは、①自己表現を促すプログラム②他児との協力を促すプログラムによって構成された。その結果、自己表現を促すプログラムにおいては、グループ開始の初期から他児への関心が高まることが示された。また、他児との協力を促すプログラムにおいては、グループの回を追うごとに他児への関心が高まることが示された。以上より、お互いの表現に注目し合うという側面と他児と協力して一つの活動に取り組むという側面が、対象児間の意識を高め対人関係の発達に寄与することが示唆された。

【キーワード】 多動性, 衝動性, 軽度発達障害児, グループセラピー, 他児への意識

In this study, the group therapy was performed to facilitate the interpersonal consciousness of the children with a strong tendency of hyperactivity and impulsivity. We conducted a questionnaire about attitude towards other group member and discussed the process of changes in attitudes. Main purpose of group program was to promote their self-expression and encourage them to cooperate each other. In program promoting children's self expression, children had strong interest in other group member for the very beginning, on the other hand, in program encouraging corporation with other children, their interest in other children were gradually increased. This result showed that to pay attention to others and to cooperate with others made a important contribution to the development of interpersonal relationship.

【Key Word】 hyperactivity, impulsivity, children has mild disabilities, group therapy, attitude toward others

問 題

近年、通常学級において、衝動的に行動してしまったり、集中力に欠けているなど、落ち着きのない子の存在が注目されている。このような子どもたちは、軽度発達障害の中の注意欠陥/多動性障害、

もしくはその傾向がある子どもとして認識されることが多い。さらに、その中には多くの広汎性発達障害の子どもも含まれているとされている（松浦，2003）。このような子どもたちは、学習面のみならず対人面でも様々な心理的問題に直面し、援助を必要としている。

多動性・衝動性の高い児童は、自己抑制の難しさを持つ。自己抑制能力の中には、内省や情緒および体験を内在化することなど自己の体験を振り返る能力が含まれている。このような能力により、人間は外部の環境の変化ではなく、自分の考えを基準に行動できるようになるのであり、自己抑制能力は集団の中で適応していく上で非常に重要な要因であると言われている（パークリイ，2003）。多動性・衝動性の高い児童においては、自己抑制の難しさを持つために他者への興味・関心を「突然話しかける/接近する」等相手を驚かせてしまうような形で表現することや、話の内容が次々に変わることが度々見られ対人関係が深まりにくい。さらに、他者との関わりにおける失敗体験を日常的に体験しやすいことや、衝動的な行動が目立ってしまい「わがまま」等否定的なとらえ方をされやすいことから、自尊心の低下などの情緒的な二次障害を生じやすい。彼らは大人が個別に関わる場合には困難を示すことが少ないが、同年代の仲間との関わりに顕著な困難を示すことから、個別性の重視とともに同年代の子ども集団の中で彼らの困難性を取り扱い、彼らの対人関係の発達を促す援助を考える必要がある。具体的には、対人場面においてより他者に受け入れられやすい方法で他者に関わることができるよう援助することと、その結果として彼らが他者に認められる体験を増やしていく必要があると考えられる。

このような子どもたちへのアプローチの一つとして、グループセラピーがある（遠矢・針塚，2006）。遠矢（2006）は、グループセラピーの利点として、子どもが安心して自分を表現することのできる居場所を提供できる点と、大人のサポートのもとで同年代の子どもたちとの関わりを通してより自然な形で社会性を身につけることができる点をあげている。子どものその場での気持ちや体験を大切にす臨床心理学的援助を考えると、社会的スキルトレーニングで目標とされる行動のコントロールのみならず、受容と共感を軸にした関わりが重要であると考えられる。

筆者らは、多動性及び衝動性の高さを主な原因とした対人関係困難を主訴とする児童を対象に、心理劇的手法を取り入れたグループセラピーを行っている。多動性・衝動性の高い児童は、対人関係における失敗体験を繰り返す中で集団活動に参加する機会を失いがちである。また、彼らの自己表現は不器用であるため（大野，2002）、他者から受け入れられる体験が乏しい。さらに認知的な特徴として、他者の気持ちに気づきにくくマイペースに行動してしまうという側面もある（中村・渡邊，2006）。よって、筆者らは「①自己表現をして受け入れられる体験をすること」「②他児の気持ちの理解を促すこと」「③他児と協力する活動を通して、同年代との楽しい体験をすること」という3つの目的に合わせたプログラムを考案し、実施した。

さて、心理劇を含め、発達障害を対象にしたグループアプローチに関する検討はこれまでも見られ、自発性や内省について変化が見られたという報告がある（高原，2007）。しかしながら、対象者自身の認知を視点に取り入れて検討したものは少ない。対象者自身の認知を確認することは、グループを運営する立場から対象者の視点を今後の活動に生かしていくという点と対象者自身がグループを振り返る機会を得るという2つの点で意義があると考えられる。

よって本研究では、多動性・衝動性の高い児童の対人関係発達を促すプログラムを考案・実施し、プログラム参加児童の他児に対する意識の変容過程に関して検討を行った。

方 法

1. グループの概要

(1) **対象児**：AD/HD または高機能自閉症、アスペルガー障害といった広汎性発達障害の男児 6 名。診断名にばらつきはあるが、多動性・衝動性を持つ点で共通している。生活年齢は 8 歳から 12 歳で、知的発達水準は平均かそれ以上である。すべての子が小学校では通常学級に在籍している。対象児については表 1 に示す。

表 1 対象児のプロフィール

人数	年齢			IQ	
	範囲	平均	SD	平均	SD
6	8 : 9 ~ 11 : 7	10	13.5	96	19

(2) 構造

①**人的枠組み**：対象児童 1 名につき、中心的なセラピーの舵取りを行うメインセラピストと補助的役割を取るコセラピストの 2 名がセラピストとして担当する。グループリーダー 1 名が場面を進行し、グループ全体をサポートするグループサポーター 1 ~ 2 名がリーダーを補助する。

②**時間的枠組み**：隔週平日の午前中 1 時間半のグループセラピーであった。セラピー 50 分、活動の振り返り時間 10 分とし、この 10 分間でグループプログラム及び他児への意識についての質問紙を実施した。

(3) **質問紙**：各プログラムへの参加意欲について「プログラムが楽しかった」、他児への意識について「○○（他児の氏名）と仲良く遊べた」という質問項目を設けた。これを「他児への意識得点」とする。回答方法は 4 件法とし、「とても、まあまあ、ふつう、あまり」から一つ選択してもらい、それぞれ 4 点、3 点、2 点、1 点を与え得点化した。それぞれの選択肢には、子どもが回答しやすいよう表情図をつけた。回答欄の例を図 1 に示す。

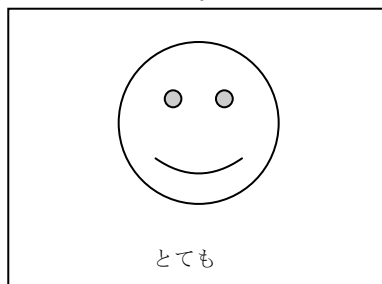


図 1 回答欄の例

(4) プログラムの内容

プログラムは、「自己表現を促すプログラム」と「他児との協力を促すプログラム」を行った。プログラムの概要については、表 2 に示す。

表 2 プログラムの概要

セッション	プログラム	プログラムの概要	ねらい
1	名刺交換	カードに氏名・学年・好きなテレビ番組・ニックネームを書き自分の名刺をつくる。お互いに交換する。	自己表現
2	ボール運びリレー	子どもとセラピストが 2 人 1 組になる。手以外の体の一部を使ってボールを運びリレーを行う。	協力
3	ジェスチャーゲーム	ひな祭り、スイカ割り等、季節にちなんだジェスチャーを行う。テーマは子ども 1 人につき一つで、皆の前で演じる。	自己表現
4	ジェスチャーゲーム	「休みの日にする好きなこと」をジェスチャーで表現する。子ども 1 名ずつ皆の前で演じる。	自己表現
5	リラックス体操	床に仰向けになり、ゆっくり腕をあげていく。自分の体に向き合い、落ち着いた気持ちを味わう。	その他
6	ジェスチャーゲーム	「夏休みにしたこと／したかったこと」をジェスチャーで表現	自己表現
7	綱引き	子ども 6 名対大人で綱引き	協力
8	綱引き	子ども（3 名ずつ 2 チーム）対大人で綱引き	協力
9	立体すごろく	子ども 2 名 1 組になり、サイコロを振り、升目にかかれたお題（例：二人三脚）を 2 人で協力してクリアする。	協力
10	風船運び	子ども 2 名 1 組でペアになり、手を使わずに 2 人で協力して風船をゴールまで運ぶ。	協力
11	ジェスチャーゲーム	子どもごとに「冬休みにしたいこと」をジェスチャーで表現してもらおう。台詞もありとする。	自己表現
12	じゃんけんリレー	子ども対大人でチーム分け。じゃんけんコースの両端にそれぞれのチームから 1 名位置につく。じゃんけんをして勝てばそのまま、負けた人はスタート地点に戻る。	協力
13	転がしキャッチボール	子どもは全員選手になり、輪になってボールを転がしあう。必ず 1 人 3 回はボールに触るようにする。真ん中にいる鬼（大人）にボールをとられないよう、合図を出し合って行う。	協力
14	鬼をやっつけろ	節分にちなんだプログラム。子どもが 2 名 1 組でペアになる。起き上がりこぼしになっている鬼が倒れるよう、2 人で協力して玉を当てる。	協力
15	ジェスチャーゲーム	「この 1 年で一番うれしかったこと」を振り返り、皆の前で発表する	自己表現
16	寄せ書き	1 年間ともに過ごしたメンバーとメッセージを交換し合う。	その他

(5) 期間 本研究の対象期間は X 年 5 月～X+1 年 2 月の全 16 セッションである。

結果と考察

①グループ全体の経過

1) 全セッション

各セッションにおける対象児童全員の「他児への意識得点」の合計を出した。結果を図 2 に示す。他児への意識得点の平均は 2.51 であったが、各セッションによって得点にばらつきがあることが示された。セッション 2 では得点の落ち込みが見られるが、この回のプログラムは対象児童とセラピストをペアにして行う活動であり、他児との関わりが制限された回であったためと考えられた。このこ

とから、他児への意識得点がプログラムの内容と関連していることが示唆された。

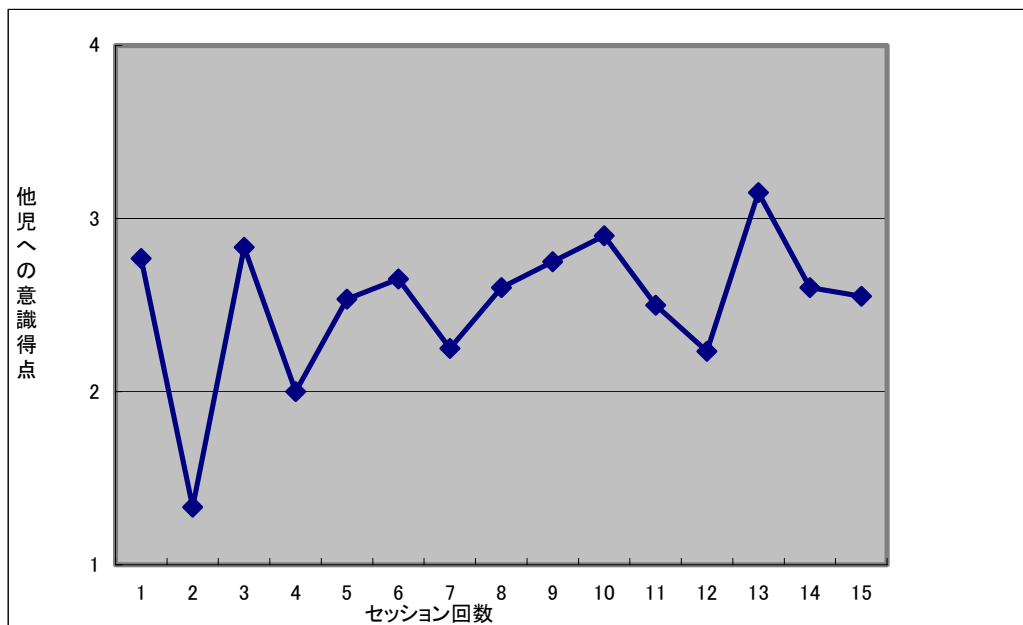


図2 グループ全体の経過 全セッション

2) プログラム別の検討

他児への意識得点について、プログラム別に検討を行った。なお、セッション5とセッション16は自己の体験を振り返ることを目的にしたセッションであったため除外して検討した。

a) 自己表現を促すプログラム

自己表現を促すプログラムとしては、心理劇的手法を用いて対象児童一人一人がグループの前で発表をする場を設定した。この時、対象児童に対しては「ジェスチャーゲーム」として「言葉を使わずに動作で物の名前や出来事を伝えること」と説明した。テーマとしては、「ひな祭り」等季節の代表的な出来事から始め、徐々に「夏休みにしたこと」など過去の個人的な体験を扱うようにした。その後、「冬休みにしたいこと」というテーマで未来の出来事を扱ったり、自分の体験を振り返る「1年間で一番楽しかったこと」というテーマを設けた。

発表前は「友達がしていることをしっかり見ましょう。しゃべらないで見ましょう」と教示した。発表の後は質問タイムを設け、ジェスチャーの内容について見ていた児童が質問したり、発表者本人から皆に説明する時間をとった。

自己表現を促すプログラムでは、セッション1とセッション15でほぼ得点に差がなく、全セッションを通じて得点が安定している。セッション4では得点が下がっているが、この回は「休みの日にすること」という自由度の高いテーマに初めて取り組んだ回であったため、テーマについてのイメージアップ及びグループに向けての表現の仕方について戸惑いがあったものと考えられる。

自己表現を促すプログラムにおいてグループ開始時より他児への意識得点が高かった理由は、プログラムの構造として「友達の表現をしっかり見る」という目的がグループで共有されていたためであると思われる。さらに、質問タイムで自分の表現について質問をしてもらえるという体験が児童の中で他児から注目をうけることをはっきりと意識する体験となり、自分に対して質問をした他児に高い得点を与える傾向が見られた。

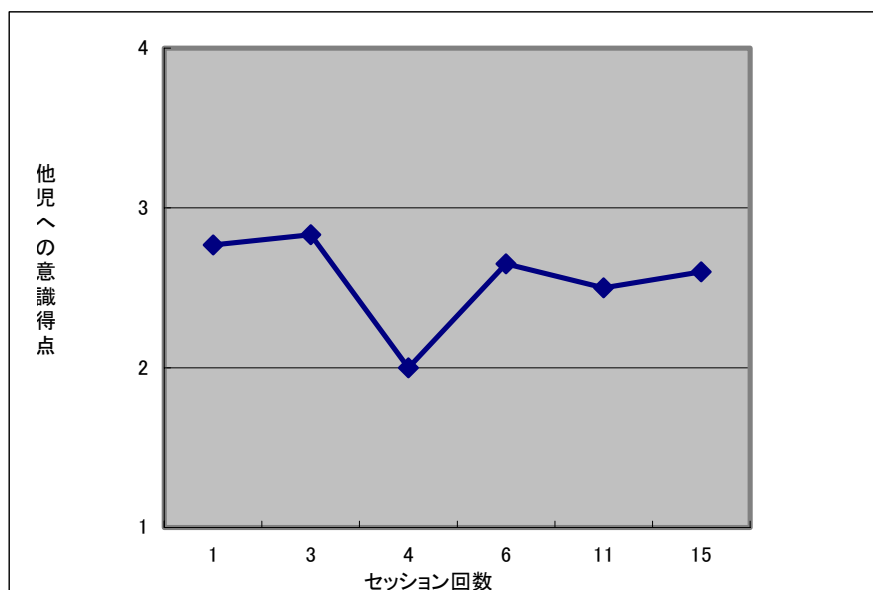


図3 グループ全体の経過 自己表現を促すプログラム

b) 他児との協力を促すプログラム

他児との協力を促すプログラムとしては、子ども対大人で競い合う活動や、子ども同士がペアで行う活動を取り入れた。活動の内容はスポーツ的要素があるものだが、明確な得点をつけて勝敗を競うものではなく、ペアになった子ども同士が考えを出し合うものになるよう工夫した。例えば、セッション10の風船運びゲームでは、ペアによってボールをはさむ場所を決めてよいというルールにした。子ども達は各ペアでボールをはさむ場所を話し合い、ボールを落とさないようにペースを合わせて運ぶことに注意して活動を行った。

他児との協力を促すプログラムでは、セッションが進むにつれて他児への意識得点が高くなるという結果であった。本グループの対象児童は、他児への興味はあるが適切な関わり方が分からず、そのことが対人面でのトラブルにつながってしまう子ども達である。グループセラピーにおいてもそれは例外ではなく、グループの初期は児童間でのトラブルが頻繁に観察された。例えば、子ども同士で話し合いをする際に耳元で大声を出したり、注意を引くために急に近づいて体に触るようなことが度々であった。また、自分の意見を一方的に発言したり、相手の意見を受け入れられずに話し合いの場を離れる子どもも見られた。そのため、セラピストが間に入って意見の橋渡しを行ったり、他児に不快

を与える可能性のある言動が起こらないように見守る役割をとった。セラピストがこのような役割をとることにより、次第に対象児間のやりとりが円滑に運ぶようになり、結果として他児と協力することが楽しい体験になったと考えられる。

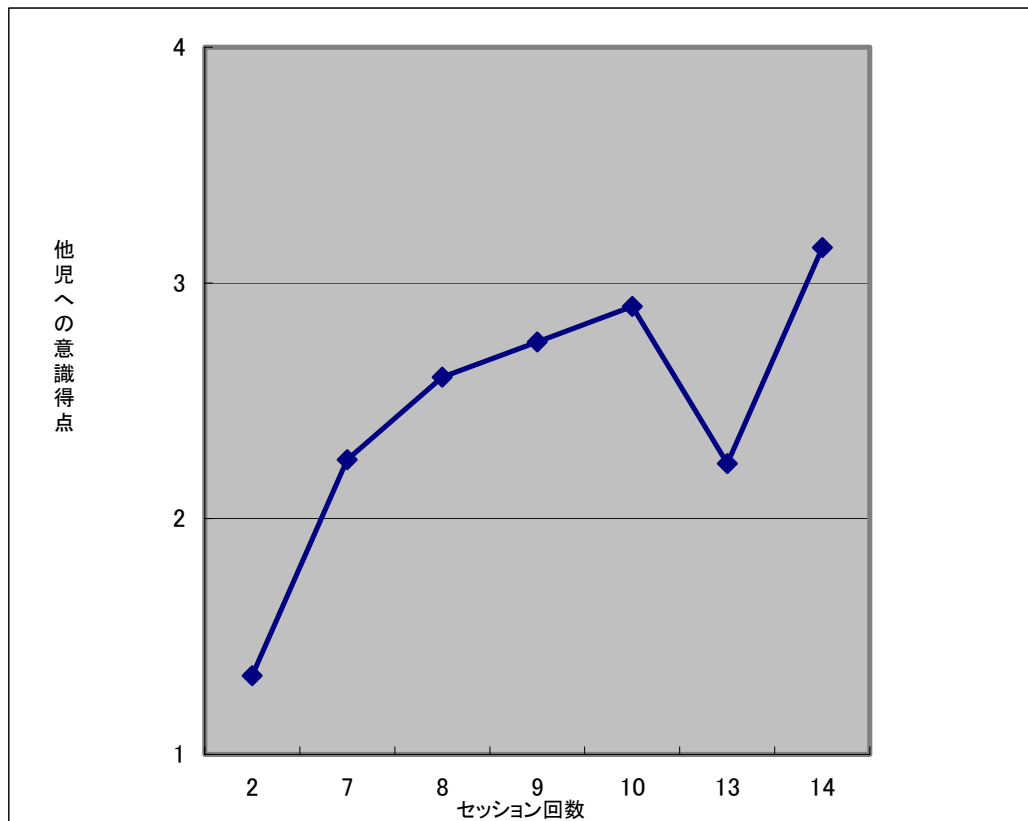


図4 グループ全体の経過 他児との協力を促すプログラム

まとめと今後の課題

本研究では、多動性・衝動性の高い児童を対象にグループセラピーを行い、自己表現及び他児との協力を促すプログラムを考案し、援助活動を実施した。それぞれのプログラムにおいて他児への意識の変化について検討した結果、どちらのプログラムにおいても他児への意識得点の上昇がみられたが、得点の上昇の仕方には相違がみられた。このことより、それぞれのプログラムが異なる側面に作用したと考えられる。自己表現を促すプログラムは、自己表現の仕方が不器用で他者に受け入れられる体験に乏しい児童に対して安心して自己表現できる場が保証されたことで、他児に注目する体験及び他児に注目される体験を実感しやすかったことが考えられる。また、他児との協力を促すプログラムは、自己抑制に難しさをもつ児童にとって初期の頃は葛藤を体験させるものであったと考えられる。しかしながら、セラピストの援助により徐々に子ども同士でアイデアを出し合うことや折り合いをつける

ことが可能になり、協力し合うことで目標を達成できた体験が他児への意識につながったと考えられる。

なお、今後の課題としては、今回報告したグループ全体の経過に加え、プログラムにおいて実際にペアを組んだ児童についての事例的な検討も交え、より詳細に検討をする必要があると考えられる。

引用文献

- 大野博之. 2002 心理臨床の立場からの ADHD 児へのアプローチ 臨床心理学, 2 (5), 583-589
金剛出版
- 高原朗子. 2007 発達障害のための心理劇 想いから現に 九州大学出版会
- 遠矢浩一・針塚進. 2006 軽度発達障害児のためのグループセラピー 第1章 グループセラピー
の理論的背景 ナカニシヤ出版
- 中村真樹・渡邊須美子. 2006 軽度発達障害児のためのグループセラピー 第7章 多動性・衝動
性による対人的困難を示す小学生の社会的志向性を促すグループセラピー
ナカニシヤ出版
- 松浦理恵子. 2002 小特集 軽度発達障害児の理解と支援 ADHD の治療 日本の現状 発達障害
研究, 24(4), 333-339
- ラッセル・A・パークリイ. 2003 日本発達障害学会第37回研究大会特別講演 ADHD の理論と診
断—過去, 現在, 未来 発達障害研究 24(4), 357-376